

[果樹部門 令和3年度 指導参考資料]

事項名	おうとう苗木の植物成長調整剤利用による副梢発生促進技術(追加) ～「ジュノハート」に対するベンジルアミノプリン液剤(ビーエー液剤)の使用法～													
ねらい	りんご研究所で育成したおうとう「ジュノハート」は枝の発生が少ない点が問題となっている。そこで平成19年度指導参考資料「ベンジルアミノプリン液剤(ビーエー液剤)を処理したおうとう苗木は側枝数が増加する」について、「ジュノハート」で検討したところ、実用的な使用法が明らかになったので参考に供する。													
指導参考内容	<p>1 ベンジルアミノプリン液剤(ビーエー液剤)の使用法</p> <table border="1" data-bbox="384 524 1422 667"> <thead> <tr> <th>使用対象</th> <th>散布濃度</th> <th>使用時期</th> <th>使用方法</th> <th>展着剤</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ジュノハート(苗木)</td> <td>25倍</td> <td>新梢伸長時(主幹延長枝の30～50cm伸長期)</td> <td>立木全面散布</td> <td>不要</td> </tr> </tbody> </table> <p>(1) 散布は葉の裏表に丁寧に行う。 (2) 使用時期は例年6月中下旬である。</p> <p>2 ベンジルアミノプリン液剤(ビーエー液剤)の農薬登録内容</p> <p>(1) 作物名: おうとう(苗木) (2) 使用目的: 副梢発生促進 (3) 使用方法: 立木全面散布 (4) 希釈倍数: 25～50倍 (5) 使用液量: 200～800ml/苗木 (6) 使用時期: 新梢伸長時(主幹延長枝の30～80cm伸長期) (7) 使用回数: 1回 (8) ベンジルアミノプリンを含む農薬の総使用回数: 1回</p>				使用対象	散布濃度	使用時期	使用方法	展着剤	ジュノハート(苗木)	25倍	新梢伸長時(主幹延長枝の30～50cm伸長期)	立木全面散布	不要
使用対象	散布濃度	使用時期	使用方法	展着剤										
ジュノハート(苗木)	25倍	新梢伸長時(主幹延長枝の30～50cm伸長期)	立木全面散布	不要										
期待される効果	苗木の副梢数の増加により側枝数が多くなる。													
利用上の注意事項	<p>1 未結果樹で使用する。 2 主幹延長枝と競合する強勢な新梢は、散布時に基部2～3cm程度を残して剪去する。 3 本資料は令和3年1月8日現在の農薬登録内容に基づいて作成した。 4 農薬を使用する場合は、必ず最新の農薬登録内容を確認して使用者の責任のもとに使用すること。 「農薬情報」(https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/) 「農薬登録情報提供システム」(https://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm) また、短期暴露評価の導入により使用方法が変更された農薬は、登録内容の変更前であっても、変更後の使用方法で使用する。</p>													
問い合わせ先(電話番号)	りんご研究所 県南果樹部 (0178-62-4111)	対象地域及び経営体	県内全域のおうとう「ジュノハート」作付経営体											
発表文献等	平成30～令和2年度 りんご研究所試験研究成績概要集(特産果樹)													

【根拠となった主要な試験結果】

表1 1年生苗木における処理濃度別の枝の発生状況

(令和元年 青森りんご研県南果樹)

台木	処理濃度	主幹延長枝						
		枝長 (cm)		副梢本数 (本)		秋季の平均副梢長 (cm)		
		散布前	秋季	散布前	秋季			
コルト	25倍	55.0	92.3	0.4	3.6	13.6		
	50倍	43.8	95.2	0.2	1.4	24.2		
	無処理	41.5	105.7	0	1.3	51.5		
台木	処理濃度	主幹延長枝以外						
		新梢の発生本数 (本)		平均新梢長 (cm)		副梢本数 (本)		秋季の平均副梢長 (cm)
		散布時	秋季	散布時	秋季	散布時	秋季	
コルト	25倍	0	0.4	—	4.3	0	0	—
	50倍	0	0.8	—	8.8	0	0	—
	無処理	0	0.3	—	61.0	0	0	—

- (注) 1 25倍区は5樹、50倍区は5樹、無処理区は4樹を供試した。
 2 令和元年4月24日に1年生苗木を定植し、地上70~80cmの高さで切り返した。施肥は有機入り複合化成肥料 (N:P:K=8:10:8) 500g/樹を施用した。
 3 6月25日に電動噴霧器を使用し、1樹当たり200ml散布した。
 4 10月3日に副梢及び新梢の発生状況を調査した。
 5 新梢長及び副梢長は1cm以上とした。

表2 1年生苗木における処理濃度別の枝の発生状況

(令和2年 青森りんご研県南果樹)

台木	処理濃度	主幹延長枝						
		枝長 (cm)		副梢本数 (本)		秋季の平均副梢長 (cm)		
		散布時	秋季	散布時	秋季			
コルト	25倍	41.7	112.9	0.5	4.3	36.7		
	50倍	41.7	125.0	0.3	2.8	43.5		
	無散布	41.4	149.6	0	1.6	48.0		
アオバザクラ	25倍	36.7	92.0	0	4.9	19.1		
	50倍	39.0	95.5	0	0.7	51.2		
	無散布	28.0	98.1	0	0	—		
台木	処理濃度	主幹延長枝以外						
		新梢の発生本数 (本)		平均新梢長 (cm)		副梢本数 (本)		秋季の平均副梢長 (cm)
		散布時	秋季	散布時	秋季	散布時	秋季	
コルト	25倍	5.5	5.0	26.8	62.1	0	1.8	19.0
	50倍	5.0	4.3	33.0	75.2	0	1.7	27.5
	無散布	5.6	4.6	29.5	80.5	0.2	0.2	52.7
アオバザクラ	25倍	2.0	2.1	31.3	63.3	0	2.3	10.8
	50倍	2.4	2.4	29.5	55.1	0	0	—
	無散布	2.2	2.2	21.4	53.8	0	0	—

- (注) 1 コルト台の25倍区は6樹、50倍区は6樹、無散布区は5樹、アオバザクラ台の25倍区は7樹、50倍区は7樹、無散布区は5樹を供試した。
 2 令和2年4月20日に定植し、1年生苗木を地上70~80cmの高さで切り返した。施肥は有機入り複合化成肥料 (N:P:K=8:10:8) 500g/樹を施用した。
 3 コルト台は6月24日、アオバザクラ台は7月3日に電動噴霧器を使用し、1樹当たり200ml散布した。
 4 コルト台は10月29日、アオバザクラ台は10月30日に副梢及び新梢の発生状況を調査した。
 5 新梢長及び副梢長は1cm以上とした。

表3 2年生苗木における処理濃度別の枝の発生状況 (平成30年 青森りんご研県南果樹)

台木	処理濃度	主幹延長枝						秋季の平均副梢長 (cm)
		枝長 (cm)		副梢本数 (本)		秋季の平均副梢長 (cm)		
		散布時	秋季	散布時	秋季			
アオバザクラ	25倍	36.0	92.0	0	12.4	7.8		
	50倍	43.1	94.4	0	7.8	14.5		
	無処理	38.3	121.3	0	0	—		
台木	処理濃度	主幹延長枝以外						秋季の平均副梢長 (cm)
		新梢の発生本数(本)		平均新梢長 (cm)		副梢本数 (本)		
		散布時	秋季	散布時	秋季	散布時	秋季	
アオバザクラ	25倍	2.7	7.4	25.8	21.4	0	4.0	3.4
	50倍	3.3	7.1	38.5	39.0	0	4.4	4.4
	無処理	3.0	5.6	32.5	41.0	0	0	0

- (注) 1 25倍区は7樹、50倍区は8樹、無散布区は8樹を供試した。
 2 平成30年4月17日にポット植2年生苗を定植し、主幹延長枝を地上90~100cmの高さで切り返した。
 3 定植2日後に有機入り複合成肥料 (N:P:K=8:10:8) 500g/樹を施用した。
 4 6月20日に電動噴霧器を使用し、1樹当たり200ml散布した。
 5 11月16日に副梢及び新梢の発生状況を調査した。
 6 新梢長及び副梢長は1cm以上の長さとした。

表4 2年生苗木における処理濃度別の枝の発生状況 (令和2年 青森りんご研県南果樹)

台木	処理濃度	主幹延長枝						秋季の平均副梢長 (cm)
		枝長 (cm)		副梢本数 (本)		秋季の平均副梢長 (cm)		
		散布時	秋季	散布時	秋季			
コルト	25倍	40.4	86.3	0	6.8	4.4		
	50倍	44.4	91.6	0	3.6	7.5		
	無処理	48.8	93.1	0	0	—		
台木	処理濃度	主幹延長枝以外						秋季の平均副梢長 (cm)
		新梢の発生本数(本)		平均新梢長 (cm)		副梢本数 (本)		
		散布時	秋季	散布時	秋季	散布時	秋季	
コルト	25倍	5.0	6.4	19.9	26.4	0	3.0	2.6
	50倍	6.6	5.6	26.9	41.1	0	0.8	21.0
	無処理	7.8	6.0	24.7	43.5	0	0	—

- (注) 1 25倍区は5樹、50倍区は5樹、無処理区は4樹を供試した。
 2 表1での供試樹を、冬季剪定時に主幹延長枝を地上130~160cmの高さで切り返した。
 3 令和元年10月に有機入り複合成肥料 (N:P:K=8:10:8) 500g/樹を施用した。
 4 6月17日に電動噴霧器を使用し、1樹当たり200ml散布した。
 5 11月4日に副梢及び新梢の発生状況を調査した。
 6 新梢長及び副梢長は1cm以上とした。

(参考価格) 25倍1樹当たり200ml (立木全面) 散布で約440円 (税込み)。